

北海道を語る

総合科目「北海道」の視座と方法

■座談会

宮良 高弘 (社会学・文化人類学)

桑原 真人 (歴史学)

岩崎 徹 (農業経済学)

小山 修 (経営学)

■司会

進藤 賢一 (地理学)

進藤 今日どういふ方向で話を進めるかというところで、三点ほど考えました。一つは総合科目「北海道」の授業をやっているメンバー、関係者全員に集まっていたかどうかということでしたので、「北海道」論の授業の展開の実態と言いますか、様子からお話をいただきませんが、その前に「北海道」論を企画した宮良先生から趣旨を頂いたあと、それぞれの先生方の「北海道論」の総合科目を行っているその中身等についてお話いただければと思います。今後の授業の進め方をどうしたらいいか、問題点や課題も含めてお願いします。

二つ目は北海道の地域研究に関していろいろな分野の専門家がおられますので、専門的な立場からどんな視点、視角で研究を進められているのか、あるいは進めればいいのか、また現在進めている研究の中身につきましてご

紹介いただきたい、最終的には北海道研究の基本的な性格が浮き彫りになればいいし、北海道の位置づけみたいなのが出てくればおもしろいんじゃないか。

三番目は北海道の地域政策について今日、一村一品だとか、企業誘致、リゾート開発のような問題が盛んに提起されております。そういう地域政策についての提言等があればお聞きしたい。フロンティアや、辺境といわれる北海道、そういう言葉が適切なのかどうなのか、あるいは今そういう状況にあるのかどうか、それから同時に今日、東京への一極集中が非常に進んでるわけですけども、中央からみた地方としての北海道、そうした視点で少し地域政策の在り方をめぐって議論いただければと思います。

以上三点について約二時間ぐらいの時間で、



左から進藤、宮良、小山、桑原、岩崎の各氏

「総合科目」を担当して

皆さんにざっくばらんに思うところを述べていただきながら進めていきたいと思っております。

さっそくですけども、「北海道論」の講義の

問題ですが、この数年来授業を展開しているわけで、「北海道論」という総合科目をおこした責任者である宮良先生の方からその趣旨、提言をいただきたいと思います。

宮良 教養で「総合科目」を設けるという

なっていますか。

話がありまして、これまで長い間「自然と人生」というテーマで総合科目を持っていたわけです。一つだけじゃなくていくつか開設するというところで、一つは私に担当せよということになりました。「北海道」というテーマで、広くいろんな視点から講義を展開してみたら、というふうに考えました。北海道の研究については、個々の研究は数多くあるわけですけども、それをトータルとして、総合的に様々な視点からみるという試みは、本学においてはあまりなされてなかったということです。本学には教養部はもとより経済学部、経営学部、外国語学部、短大もあるわけです。教養部の先生だけじゃなくて、経済、経営の先生にも加わっていただいて、総合的に北海道を見ようということではじめたわけです。

進藤 授業展開は、具体的にはどんなふう

宮良 授業展開はですね、一人三回ですね。多い人は四回という人がいるわけですけども、まず「歴史」から入りまして、そして「生活文化」、「政治」、「農業」と「地理」ですか、そして「企業」ということで展開しています。

進藤 具体的に授業を進めてみて、どんな授業の展開の仕方をなされてきたか、これを各々の先生方に一言ずつお聞きしたいんです。岩崎先生から。

岩崎 三回の講義と、一回はVTRをみました。第一回目は北海道農業の基本的性格や特徴について概観し、第二回目は北海道農業の明治からの歴史、第三回目は地帯構成と今日的課題という順に講義しました。毎回きちつとテーマごとに終わることはできませんでしたが、講義の流れには気を配りました。北海道農業の基本的性格が、歴史の中でどう貫

かれたか、逆に今日の北海道農業が歴史的にどう形成されたかという観点で話しました。

北海道農業の基本的性格とは、第一に内地植民的といえますか、国家主導、土地改良投資をはじめ大規模な国家投資と価格支持とに支えられてきた。第二に、はじめから商業的農業、それも土地利用型の加工原料型農業で世界市場にリンクされて展開している。第三に寒冷地農業で土壌条件が悪く、三年に一回は冷害という歴史があり、冷害の克服過程で北海道農法が形成されてきた。以上のことをふまえながら、現段階から歴史をみるということに多くの時間を費やしました。

具体的に言えば明治農法がクラークとか、ケプロンとかがいわゆるアメリカ東北部型の農業形態を作ろうとしたがいきづまりながら改変されて、北海道農法、いわゆる「畜耕手刈」という形が形成されたんですね、それが改変される過程で稲作が入ってくる。

それから昭和恐慌期に農業がかなり大打撃を受けるわけですけども、それを契機にして畜産が入ってくる。それから戦後何度かの冷害を契機に根菜類が入り、畜産が導入される。さらに減反とかそういう大きな政策転換の中で米の比重が減って、野菜とか集約的畑作が入ってくる。要するに冷害や大きな政策の転換を契機に北海道農法が、非常に独自の農法が形成されたという歴史の流れですね。北海

道農業の基本的性格なり地域的性格が、歴史的に非常に大きな変遷をたどりつつ、今日の厳しい状況の中で新たに再編されようとしているという流れの中で講義したつもりなんです。学生はいろんな学部がいて、そういう意味では反応も経済学部だけの講義と違っておもしろかったし、結構質問もでたし、レポートなんか見ますとかなりいろんなおもしろいレポートがあり、自分で勉強してきたなという感じがしまして、そういう意味では僕としても非常に刺激的な講義だったと思います。

進藤 わかりました。桑原先生どうですか。

桑原 私は、四月の最初に歴史的な立場からみた北海道史の諸問題ということで、四回やらせていただいたんです。それで四回の内容は、まず一番最初に北海道、特に近代の北海道をどういうふうな視点から捉えるかということ、先程岩崎先生もおっしゃられたように、内地植民地とか内国植民地とかいふような言い方があると思うんですが、北海道の場合それが非常に明確であるという側面があります。日本のなかの北海道というふうなものを主要テーマとして話そうというふうな思ったわけです。その際に同じような内国植民地というのは北海道だけじゃなくて、近代の沖縄なんかにも実はそういう側面があるわけです。そこで沖縄と北海道、それから中央政府の二つの地域に対する政策というもの

を簡単に比較しながら、近代の北海道なり沖縄なりの特質といえますか、そういうものをつかむべきだと思ったわけです。

それから二番目にはこれも今、岩崎先生がおっしゃられましたように、近代の北海道は非常に大きな国家投資というものがなされたわけですけれども、具体的に言いますと、明治二年の開拓使設置に始まりまして、それが一五年からは三県時代、それから一九年から北海道庁というふうに変わってきているんですね。そういうふうな行政機構の変遷の中で、通常は明治一九年の北海道庁設置をもって、従来の直接保護政策から間接保護政策に転換するということが言われるわけですけれども、そういうふうな近代北海道の開拓政策の変遷というものを大づかみに概観したわけです。

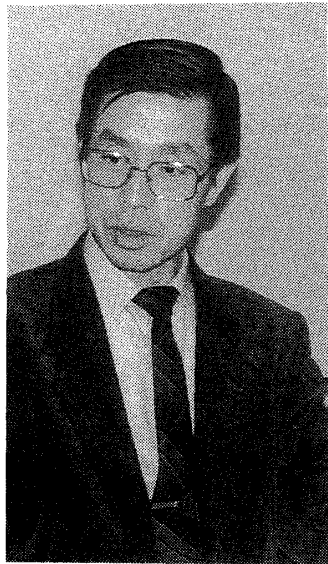
そして三番目には、そのような開拓政策のもとで、北海道開拓をなしとげたのは誰かという問題になるわけです。従来ですと、土族屯田ですとか、あるいは土族の集団移住ということがよく言われたわけですけれども、最近の研究ではそういう人々よりも、もっと開拓の基礎を築いた人々の歴史を掘りおこすべきではないかということで、囚人労働とか、それからタコ労働と言いますが、そういう人達の存在が問題になっているわけです。そこで私は特に囚人労働、それとタコ部屋労働の

存在、この二つに焦点を合わせてこれらの人々の果たした役割といえますか、それをまとめてみたわけです。

最後の四番目は、北海道には先住民アイヌの人々がいるわけですが、これらの人々が北海道開拓という現実の前にどのように抑圧されてきたかということを取りあげてみました。非常にトピック的ではありませんけれども、近年の北海道史研究の一つの動向を中心にして、講義を組み立ててみました。

進藤 どうもありがとうございます。では小山先生。

小山 総合科目としての「北海道」は三年目ですか。従来の二年間は、一回目に「北海道の経済発展と産業構造」ということで明治維新から第二次大戦期まで、それから戦後は、大体、高度成長期が終わって低成長期に入ってきた時代までについて資料を提供して、それを検討していこうということで、まず近代産業化の歴史について大雑把な把握を試みま



小山 修氏

した。その次に二回目として、現在どういふふうになっているか、この点では特に低成長移行の時期以後の北海道、つまり七〇年代後半から八〇年代の北海道の変化について考察しました。「北海道の企業」と言っても、企業そのものにはいきなりアプローチしても分かりにくいので、産業構造の特徴との関連で企業経営を見ていこうということで、現状の問題を少し広く見ていこうという意図です。

それで最後に三回目は、最近、ここ一〇年ぐらいを射程に入れて、この北海道の企業経営の特質ないし経営者の志向の特徴などを考えてみようと思ってみました。これらの問題については、銀行系や民間の調査機関による調査研究が盛んに行われるようになっていきます。私のゼミナールでも北海道のいわゆる地場製造業を対象にしたアンケート調査（対象企業数は三二七社）をやりました。その結果とつきあわせながら、北海道の企業の経営特性というものを何とか析出できないか、という問題意識で学生諸君といっしょに考えてきたわけです。

基本的な論点としては、岩崎先生や桑原先生から出されていましたように、北海道の近代産業化というのは、内国植民地型というふうな言われているわけです。国家資本を投下してそれを民営化していくという形態をとったわけですが、特に今年、私が学生諸

君に訴えていることは、現在でも基本的に内国植民地論でアプローチしていくということも可能だとすると、第三期の植民地化の時代として捉えられるのではないかと、ということですね。第一期というのは戦前というか明治期ですね。殖産興業政策から民営化されて、官営から払下げで民営化されていって、それを基盤にしながら財閥系の各企業が、いわゆる資源略奪型の産業企業を立地させる。そういう形態が起きてきた時期ですね。これが第一期と考えます。

第二次は、戦後の財閥解体政策が転換されて、GHQの日本再建のための北海道活用論といえますか、あるいは食糧基地論だとかいろいろ言われていますが、そういう政策の中で再び北海道というものが一種の内国的な植民地として、資源略奪型でまた再開します。それは高度成長の過程で資源の枯渇という問題と、それから特に六〇年代末期から展開された開放経済体制移行という問題とも関わって、七〇年代以降は非常にシビアな外国との競争、それから国内の独占資本の政策、例えば鉄鋼ですとプラント輸出ですとか、そういう方向へと展開していくわけですが、今日でいうところの産業空洞化や、外国、特に発展途上国へのプラント輸出などがもたらしてきたブーメラン効果と言われる現象によって北海道の産業が危機に陥れられてきた。そうい

う過程を経て現在の産業構造自体が非常に大きく転換してきているということ、その中で企業というものがどういう役割を果たしているのかということを理解してもらおうということです。

第三期の現在の「植民地化」というものをどう捉えるかというのはなかなか難しいんですけど、これは本州の他地域、いわゆる大都市圏ですね、そこに本社をもつ独占資本が、例えば北陸ですとか山陰ですとか、いま四国もやられているわけですけども、さらに東北ですとか、そういうところにどんどん進出をして全国制覇をしている。それとほぼ同時期かちよつと遅れて北海道がそういう形態に見舞われるというふうな状況になってきたんですね。

それがいいか悪いかという価値判断は別にしまして、私は北海道への独占資本の進出という問題をとりあげると、産業構造の転換ということからまっつて、資本の交代が行われてきた、主導的な資本が変わってきたんだというふうに見ているわけです。そういう変化を見てとってもらいたい。その中で北海道の地場経営者、これがどういう特性をもっているのかという比較をなんとかやってみたいという形でやってきた。けれども資料はたくさん提供した割には、学生諸君には、歴史のところはかなりわかってもらえたようですが、

歴史―現状―経営特性分析のつながりが、特に最後の経営特性分析というところがなかなか理解してもらえなかったような感じがします。

今年は大きく発想転換しまして、従来のように最初から固い話でいってもだめだと思ひまして、昨年八月『朝日新聞』北海道版に連載された「北海道はどこへ」というのを学生諸君にまず読んでもらって、それで何でもいから北海道の産業、経済、企業に関する今の話題を何か選んでレポートを書いてきて下さいと言いましたら、相当いろんなことを書いてきました。リゾート化の問題、つまり観光化の問題、第三次産業の肥大化という問題に焦点が、学生諸君の目が行ってしまつたという感じもあります。その辺で少しジャーナリストイックというか、アカデミックでなくともよいではないかということで、今年はちよつと授業のやり方を変えてやっています。

進藤 どうも有難うございました。宮良先生。
宮良 私は北海道の生活文化の視点からの授業展開ということで、人間の問題、人間と文化の関わり合いの問題を考えてみました。どちらかといえば内容を人間の生活文化の問題として取り上げてみようと考えたわけです。特に、北海道の和人社会の形成を見ると、本州の都府県からの移住者によって北海道の和

人社会が形成されているわけです。北海道で息づく文化はどちらかというとなら文化です。その中心は稲作文化であるわけです。稲作文化を北海道にもたらした人々が、母村を異にする様々な地域から移住してきているわけですので、そういった人々が生活文化を通してどのように結合してきたかを見てきた訳です。人間の結合によって文化は変わっていくわけですけども、その流れをとらえてみようということが主題です。

まず、北海道に入ってきた和人はおそらくは津軽海峡を隔てて、北上してきているわけですから、アイヌとの接触が考えられますね。初期の段階では、アイヌとの接触過程においては礼儀をもって和人も接していただろうと思うんです。初期の和人も少数であったから、支配と服従という関係ではなくて、互助協力の関係だっただろうと思います。ところが、和人が増えることによってアイヌを支配していくという形態に次第に変わっていっただろうと思うんです。その関係からポタンのかけちがいが生じてきた訳です。

わが国においては、一般的に客人（まろうど）を大切にするという考え方があって、すね、それは異邦人歓待(hospitality)という思想です。アイヌにもそれがあつたのです。コロポックルの伝説の中に、それを見出すことが出来ると思ひますね。アイヌは、コロポ



宮良 高弘氏

ツクルの中に異民族の姿を見て、異民族に対しての接し方を学んだと思うんです。その考え方は、日本社会においても普遍的に見い出すことができます。この客人（まろうど）は、時としては乞食であったりします。姿にまだわされることなく、万人平等だという思想がこの伝説の中に含まれています。沖繩においては、石垣島の川平部落にみられるマユンガナシ（真世加那志）の伝承があります。そういうことからアイヌも和人も人間に対する処し方において、その描く世界はもともとは共通していただろうということが考えられます。その力関係が逆転したということは、人口の問題です。それから、社会の内部の問題もあります。和人の方では、文化的にも優位であるという自負心があったと思うのです。これが文化的な問題です。このようなことが、相互に影響していると思います。

その過程に、和人の人口は移住によって増え続けてきたわけですから、人口の減少をた

どるアイヌはどうしようもなかったのです。北海道を支配する文化はその後は和人文化だから、最終的には、和人に同化しないと生活ができなくなっていくわけです。現在のアイヌの生活をみてもそうで、日本文化に同化しないかぎり、アイヌは生活ができないという現実的な問題があるんです。少数者から大多数者への文化的影響は少なく、大多数者の和人文化に少数民族であるアイヌが同化しているということですが、沖繩出身の私としては悲しいことですが、それが、人権を問題視する以前の弱肉強食時代からの現実です。その歴史的な流れにおいて、具体的にどのようなそれぞれが担う文化が変化してきたかを、和人の世界において考えてみる必要があるであり、義務だと考えるのです。

そして、次の視点は、やはり津軽海峡を挟む両岸の歴史を辿ってみることで、これは、桑原先生の専門に属するわけですが、北海道へ和人が入ったのは、鎌倉・室町時代からだと一般的に言われているわけですが、それはおそらくもっと古い時代からであったと考えているわけです。というのは、道南および青森県側の文化をみると、かなり同質化しています。隣接する村々を訪ねてみても、ほとんど生活文化が共通しているということなんです。ですから、それを同一文化圏域と考えていいのではないかと考えています。歴史学

者とか経済学者の中には、道南社会を、東北に加えて、東北六県ではなく東北七県と言っている人もいるわけです。文化的に非常に似ているということから、私は北海道側からみて津軽海峡文化圏域を考えたわけです。それは農村社会においてでなく、ニシンを追いながら人口移動をする漁村社会において、とくにみられます。

その後、明治以降に北海道に移住してきた人々の歴史は新しいので、彼等が出身地からもたらした生活文化は完全に混合・融合はしていないということになります。つまり、一つの文化圏域を形成する状況にはなっていないということですが、そういうことから、明治以降の開拓村落を、A型からE型までの五つの型に分類して、生活文化の形成過程を把握することができると思います。

つまり、A型は同一母村同時型の村落であります。B型が同一母村継時（継続）型。C型が二異母村同時型。D型が二異母村継時型、E型を多異母村混合型という具合に分けてみたわけです。

例えば、栗沢町の礪波とか、羽幌町の初山別とか、この近くでは手稲山口、そういうところがだいたいこれにあたります。A型からB型の流れにあるんですね。A型はアイディアタイプでありまして、北海道に開拓移民が入って、同じ母村の人々のみで現在まで同

じ社会を形成しているということは有り得ないわけですよ。ですけれども、村落の型を分類していく上で、プロトタイプとして、その型を基本においておく必要があるわけです。それです。この型を基本においてみますと、先程言った栗沢町礪波などは、どちらかというA型というよりはB型と言っていると思います。うんですね。そういう傾向が、だいたい北海道の移住の流れです。自分の故郷から人を呼びよせているんですね。そういうことでB型の同一母村継時の村落が形成されるのです。

また、C型の二異母村同時型は、同じ村落に異なった文化を持った人々が、同時に来て村落を形成していくという場合ですね、この場合はなかなか一つの村落が統一のとれた村落の形をもてないことになるんですね。つまり、文化的葛藤が生じるわけですね。文化的葛藤があるから、人々は共同生活を行なう場合において、必ずしもうまくいかないということになるかと思えます。このC型は、東旭川や岩見沢に事例を求めることができません。岩見沢の事例ですが、鳥取藩士と山口藩士が中心となって村落を作っているんです。異なった文化を担った人々ですから、そこに文化的葛藤が生じるということです。

D型の場合は二異母村継時型で、例えば雨竜町がこの型です。雨竜町は、四国の徳島から入った人達が、最初に村落を作ったわけ

すけども、彼達が徐々に他出ていったところに、富山県の人々が移住し、現在においては、八割までが富山県人です。それから、隣の新十津川ですね。これは奈良県の十津川から来た人が最初に村落を作っていたわけですが、彼達が出ていくところを、雨竜と同じ富山県人が移住して来て村を作ったというわけです。ここでも、C型ほどには文化的葛藤は見られないけども、もともとのまとまりは、あまりよくない地域だと思います。

最後のE型は、北海道においてかなり多くの地域で見られるけども、多異母村混合型です。例えば北見、相内、端野、上湧別などの屯田兵村は、明治三〇年に移住して形成されましたが、ほとんど全都府県から来ています。札幌の西岡などは、だいたい戦前までに移住してきた人々の出身地を見ますと、一八都府県からきているわけですね。北海道の開拓村落はこのように分類して把握できます。

こういった村落は移住当時の村が固定化して存在しているということではなくて、絶えず繰り返される人口流動や新しい文化を取り入れることによって、変容を繰り返してきているわけですね。現在では、交通やマスメディアの発達によって様々な形で新しい文化がもたらされてますけども、当時は北前船が外部からの文化を運ぶ唯一の手段であったわけですから、北前船が運んだ文化的影響の問題

を見逃すことが出来ないであろうと思います。それから、進藤さんや先程岩崎さんも言うておられましたけども、欧米の農法をもたらしたお雇い外国人の文化の影響の問題ですね、それがあってですね。しかし、私がここで言いたいことは、議論の中で展開していくことになると思いますけども、欧米的農法文化は定着していないわけですね。北海道の中で、それがなぜか、という問題がまたでてくる。文化は、受け取る側が必要とする受け皿がないと、受容しないという特徴があります。

文化は、移住と同時に移住者によってもたらされるし、あとで入ってくることもあると思うんですが、実際に移住してきた人々もたらした文化の上に、時代の流れにそって後でこういう文化がどんどん入りこんでくるということ。そして、これが北海道の社会に大きな影響を与えてきたということです。そして、それがいずれは相互に影響し融合して、地域的な特徴を形成しながらも、「北海道文化」と一つの言葉でくくれるほどに、村落をこえて北海道全域に共通的に見られる北海道化した文化というのが、いずれは生まれ、一つの全北海道を対象に議論が出来る段階にまでいくのではないかというわけです。私はそう見ているわけなんです。それを私は「総合的・体系的把握」と言っているのです。そ

ういうことを前提として講義を展開してきたわけです。研究の流れと講義の流れを同じくして考えてみたいということですよ。

進藤 有難うございました。ただいまお話を承っておりますと、それぞれの先生方は自分の専門としての研究分野にひきつけて授業されているということがよく分かるんですけども、問題性のある事柄がたくさん出てきているわけなんです。それぞれ言われている一字一句がいろんな角度から検討される必要があるような問題があるわけですが、そういった議論は後ほどにしまして、実際に授業を展開してみても、一つは学生がどんな反応、あるいはどんなところに興味・関心を抱くのかというあたり、それから先程岩崎先生はいろんな学生がいて、おもしろい、いろいろ教えられることもあると思いますが、そのへんの内容的な問題で具体的におっしゃっていたければありがたいのと、先程、小山先生が朝日新聞を教材に使われているということですけども、具体的に教材としてどういったものを授業展開の中に組み込まれているか、ざっくりばらんにどなたからでも、実践してみた段階で感想として出てきていることをおっしゃっていただければと思います。

宮良 形の上では、学生数が増えてきています。昨年までは八〇人くらいしかいなかったけれども、今年は一六三人ですか。そういう

うことは、総合科目「北海道」が定着してきたというべきであるのか、偶然にこうなったというべきなのか。

宮良 ただもう一つ問題点というのは、各先生の視点がみんな異なっている点で、自分の視点から講義しているわけですから、受講する学生が、一人々々それをどのように総合させていくのか、ということが問題だろうと思うんですが。

岩崎 今初めて他の先生がどういう講義をしたか知ったんですが、僕ら教員同士の中でもさまざまな議論がありそうですね。学生がその辺をどう咀嚼したかわかりませんが……

僕の講義もそういう意味じゃ、歴史は桑原先生が担当されますし、宮良先生が農村社会について講義されますし、農業地帯構成という点では進藤先生がやられ、かなりダブッています。ただそれぞれ別の視点で別の視線で議論するし、だからダブッたほうがかえって、違う視点が当然出てくるわけで、学生にとっ

ていいと思うけども、ただかなり理解は難しいだろうなあという感じはしますけども。
宮良 そういうことはいえます。ですから我々の中で歴史の流れを一つの軸として、横の問題をうまく構造的にえがくことが重要だと思います。

進藤 桑原先生いかがですか。

桑原 私も毎回三〜四枚ずつプリントを配

って、それで四回やったから結構な枚数のプリントになったわけですけども、結果的に説明する時間がなかったりしまして、学生諸君は消化不良をおこしたかなというふうな気があとでしました。それと先程四回に分けて講義を展開したと説明しましたが、毎回あまりにも取りあげた問題が大きすぎたのではないかと気がしています。やはり例えば開拓の歴史なら開拓そのものの問題だとか、もっと絞ってやったほうがよかったかなと思います。例えばアイヌの人々の問題は、北海道開拓の本質を考える上で、極めて重要なんですよ。そういうふうな問題を限定したほうがよかったのでは、というような反省もしているわけです。それとあと、四回のうち一回ぐらいは視聴覚的なもの、例えばスライドとかビデオですが、それを利用したほうがもっと学生諸君は理解できたかなという気もしているんです。

進藤 小山先生どうですか。

小山 私は一昨年、昨年と図表を中心にしてB四版で二〇枚配りまして、まさしく桑原先生がおっしゃったように、多分学生は消化不良、ただ授業としては三回でしかも正味しゃべったとしても一時間二〇分くらいですね。そうしますと、その中でこれはあくまでも資料ですよ。その中で各自が私の話を聞いてどこに関心をもって、そこから何を読み取る

か、その大きな流れとしてまず北海道の産業発展というのを捉えてほしいなというのが、一昨年、昨年の私自身の授業のテーマだったわけです。それでさっき言いましたように、歴史をやって現代をやって、そして経営者論とか経営特性論といいますがそういうものを作る。そうすると彼らの中でどうつながるのかな、という不安はあるんだけど、まあ一応やってみた。レポートには授業に対する批評を必ず付けてくれるよう頼んだんですが、割におもしろかったというのがあります、他方ではプリントが多くて大変だったというのがあるんですね。それで今年はそれで思い切って、三回でやれるようなアップ・ツー・デイトな問題から入っていく。これは岩崎先生が指摘された点で、その辺から入った方がやはりおもしろいんじゃないかというふうに思いました。その限りで説明に必要な歴史を振り返っていく、あるいはいろんな調査を見よう。あと一回残っていますのでそういう程度で今年はいえたいなというふうに思っています。

岩崎 僕も実は昨年までは、膨大なデータを配って消化不良をおこさせたという反省があり、今年はこのことを言うのにだいたい一〜二表ですむようにし、講義全体で二枚ぐらいでやってたんですけども、それでよかったのかなと思っています。経済学部で専門を

教えていても、三、四年生でも表の読み方とかなかなか慣れてませんので、非常に難しいと感じているんですね。また、歴史を現在からみるのは非常に難しいので、僕は小説をかりまして、例えば北海道開拓でしたら、本庄睦男の『石狩川』や辻村もと子の『馬道原野』北海道型地主の話でしたら、有島武郎の『カインの末裔』とそれから高橋三枝子の『蜂須賀の女たち』などをとりあげ、その中で具体的に小作料率がどれくらいで、凶作の時にはどういう生活をしていたか、そういう話をしました。戦後開拓だと、開高健の『ロビンソンの末裔』そういう意味では興味は持ってくれたと思うんです。あと一回だけですけど、北海道農業に関するNHKのVTRをみましたが、これも視覚に訴えるという点で効果があったと思います。

宮良 私はプリントを配るとか、そういうことをあまりせずに、これまでの自分の蓄えたデータを先程述べた視点でもって、講義をしているということなんです。

進藤 僕は北大農学部の農業経済の先生に「今の学生はあまり本を読まないのでもうその関連する本を読ませたい」。有島農場を取扱った『カインの末裔』、小林多喜二の『不在地主』、十勝をとりあげた久保栄の『火山灰地』。これはまずその単位をとる前提だから読ませるといって、教材として扱ったと

いう話を聞きました。なかなかこういった小説というのは読みにくいんですね、今の学生には。だからどこまで読み切って理解するかというのは大変難しいんですが、いろんな書籍を読ませるといって中心にした教材提供というのも一つあると思うんですね。それから諸資料、特に統計、あるいは関連する分野の図表を配る。それから視聴覚を利用する。ビデオを使うというのも一つあるだろうと思うし、スライドやOHPを使うとか、いろんな多彩な角度から教材を使って北海道というものを、イメージとしてある程度認識させていくことが教育現場では必要ですし、その中からある程度それぞれの先生方の視点や視角というのか、そういうものをだして、展開する。そういう意味じゃある程度、先生方の中からいかに授業内容が成功しているんじゃないかなという感じがします。先程も出ましたように、年々総合科目「北海道論」の学生が増えているということはその査証でもあるように思うんです。只今の件に関連して授業等については特にございませんでしょうか。今後、こんなところに力点をおいてやってみたらいいと、まあ授業の手法上の問題とか、内容の問題とか含めてもし何かあったら。

宮良 最近の学生は、自分の考えていることがうまく表現できないということがありません。私は、自分で調査した内容について講



岩崎 徹氏

義をするわけですが、それについて質問しながら授業展開をしています。その場において自分の考え、私が説明している内容を本当にわかって答えているとは思えない点がありますね。内容についてわかってはいるけれども、それがうまく表現できない学生が最近の高校教育の影響でしようが、増えている感じがするわけですよ。それはどうなんでしょうね。授業を展開しながら、私は聞くんですよ。内容についてどう思うかとか、あまり自分から積極的に発言しないということがあるような気がするんですけどね。

小山 その辺では最後にパネルディスカッションをやると、毎年、こちら側からの一方的な情報提供になって、フロアーからの発言がないことがあるものですから。

宮良 なるべく教育する過程においては、学生がやっぱ一方的に聞くのではなくて、受身ではなくて、我々は講義をするからむしろは受身なんですけれども、それをいかに引

き出すか、その過程がないと、理解しているのか理解していないのかわからない。

進藤 一六三人からなりますとむずかしい。ゼミ形式ではそういった対話で授業を進められることはあるんですけども、教師の方で反応をどうとらえて展開するかということになってくるので、なかなか微妙で難しい問題だと思わんですが、特に今の学生はあまり発言しない、自分の考え方を上手に表現できないということもありますからね。

岩崎 なかなか難しいんですけども、反応は、結局は最終的にはレポートとかそういう形でどの程度理解しているか、どの程度意欲的に聞いているかというのが分かるんですけど。僕はむしろ講義の内容というよりも、講義の中でなるべく多く設問をしましたね。例えばクラークさんは何しに来たのか、何故一〇カ月しかいなかったのか、何を言ったのかというのを聞くわけですよ。いつごろ来た人か？ 案外知らないんですよ。そういうことを聞いたり、また、これ邪道なんですけども、例えば北海道には封建制がないと言われていて。それを具体的にどう説明するか、北海道は人間の上下の関係、男女の関係がフラットである。例えば男言葉と女言葉の区別がほとんどないとか、席の座り方、風呂の入る順とか、どうだ君たちの家だと聞くわけですけども、しかし現在は食事の仕方なんていうのは

まったく個別化してますし、席の座り方なんてあるようなないような様式になってますけども、それが府県というのはそうじゃないんだ。例えば東北なんかだと違うんだという。その辺ではオヤツというような顔をしてますね。

岩崎 歴史はなかなかそういう意味では難しいですね。タコ労働とか、囚人労働なんかというのは、学生ははじめて聞く話なんですよ。

桑原 表面的には知っているんですけども……。僕は講義の際、自分でおもしろいと思った囚人労働やタコ労働に関する資料を取りあげまして、それを教材として配布しました。本当はそれを私が解釈して、学生諸君に講義しなければいけないんですが、むしろ生の資料の持つ迫力のようなものを学生諸君に伝えたい、という気が今でもあるもんですから。それと、北大生なんかと違って、札大の場合はやっぱ道内出身というか、道産子が多いでしょう。ですから本州出身の人なんか、学生の中に多ければアイヌ問題とか、タコ部屋とかいう話題についても、もっと興味があるような気がするんですけども。

進藤 どうですか、今教材に関連した話になっていきますけども、それぞれの先生方の専門性で必ずしも現代と結びついた講義が展開できるというわけではないんです。例えば地

理では、イギリスが日本と非常に違つてトピックジオグラフィという形で常に時事問題的なものを地理的にアプローチすることを盛んにやるんですね、確かに今の学生達はあまり歴史的な古いものと現代とがどういう結びつきになつてゐるのかというのが全然分からなくて、ぷつぷつ切れてゐる。ですからそれぞれの今までの先生方の話は現代の問題と歴史というものをある程度結び付けた形で講義をされているような印象をうけたわけですけども、今後の課題として僕は学生に対する興味をどう持たせるというか、関心を呼び起こせるということについて、おもしろい方法だなと思つてゐるんです。

小山 確かにその通りだと思いますね。北海道論ではなくて私の主要担当科目の話ですが、学説史ということではほとんど歴史を教えるわけです。今の高校生には歴史、とくに世界史は人気がなくて、なぜそんな面倒くさい勉強をやらなければならないのかという疑問を乗り越えられないでゐるようです。それが、大学にきても基本的に払拭できてゐない。この疑問は、私自身にも経験がありまして、兄が高校の歴史の教師だったものだから、私が中学生の時代に何回も突っ懸かったことがあります。鮮明な記憶が残つてゐます。私としてはずつとめぐりをしてゐました。兄は高校の教師なりの答えをしてくれたのですが、

問題は、この疑問を学生に突破させるのがまず第一関門ではないかと思ひます。それで、私の講義では必ず時事問題をとりあげてゐます。

それがその日の講義に関係あるかないかというのとは最初は学生には分からないと思うんですけれども、こちらでは何か関係づけていくんですね。そういう提起の仕方をする、その後で試験の時に授業の感想を書かせると、前段は面白かつたけれども後は面白くなかつたという形で受け取られる。ですから北海道論のようなこういうトピカルな問題を扱える科目の場合、自分のメジャーでやつてゐるような前段の話をもつとメインにした展開ができないものかというので、今年は産業のリストラ（再構成）とか、あるいは地域社会問題としては、室蘭ルネサンスとか、そういうところから話をはじめて、果たして北海道というのは何故そうなのかという問題提起の仕方今年はしたんですね。そうすると、レポートでは、非常にいろんな角度から学生は彼らなりに問題を捉えてゐる。楽しみに読んだのですけれども、中にはほとんど新聞の論説をひっぱつてきたのもあるんですけども、大半は自分なりに捉えてゐるんですね。そういう方法の方がおもしろいんじゃないか。ただ、歴史をやる上ではどうやってそれに引き付けていくか、私も昨年までは明治期から説き起

してゐたんで、学生から見ると、どうも何を言つてゐるんだらうか分からないという見方もあつたんじゃないかと反省はしてゐるんです。

桑原 今の小山先生のお話につながる事だと思ふんですが、この授業じゃなくて別の授業なんですけれども、やつぱり北海道というのは特殊な面があると思ひます。それでその前に、朝日新聞北海道支社は割合本州出身の記者が多いせいとか、北海道版の記事に北海道のいろんなことをとらえるうえで、工夫された記事が多いように思ふんです。うちの学生は地元の学生が多いせいとか、どうしても北海道ときいたら新鮮な感じは覚えなないという人が多いと思ふんですね。例えば朝日の北海道版に本州のいろんな企業なんかの支店長がこつちへやつてきた時に感想を述べるような小さなコラムがあるんですね。その中で住宅金融公庫の札幌支店長が北海道に赴任してきて、そこで北海道の住宅のいろいろな問題をやべつてゐるんですけども、例えば北海道の住宅というのには案外一戸当りの面積が狭いということや、それから北海道の人というのは金融公庫のローンで住宅を買つちゃうんですが、その場合、つい最近までは非常に返済率が低く、ローンが返せなくてそれで住宅を手放しても、「また買えばいいや」というあきらめに似た、一面では楽天的な考え方、そのような道民の感覚のあり方を指摘してゐる

わけですね。そういうのを学生に読ませますと、彼らは非常に反発します。僕としては、そこからさらに何故本州の企業人はそういうふうには北海道の企業や道民を見るのかということ、突っ込んでゆくような方向に授業をもつてゆかなければと思ったりしているんですけれども……。そういうふうな今の問題からさかのぼってみるのも案外重要かなと思うんですね。

小山 今、非常におもしろい問題が提起されたんで、桑原先生に教えていただいで、今年配ったんですが、朝日の東京の論説委員ですか、編集委員の大谷健さんという人が、さきほどの「北海道はどこへ」という討論の東京の代表者なんです。それであとの何人かが札幌支社ですか北海道支社のいわ

北海道研究の視座

進藤 次の課題は、それぞれ研究分野が皆さん違うんですが、多かれ少なかれ北海道に興味を持たれて、北海道という地域をテーマにして研究されている方が多いので、お話を伺います。先程授業の中で出されてきているもののなかにいくつか話題性のあるものが

ゆる地場的視点を代表している。それが論争をするという形で討論を進めているんですね。これを使おうと思つた理由はそこにありまして、東京的視点つまり、さつき進藤先生が、

中央か辺境かという視点を指摘されたんですが、東京的な視点から見た北海道と、北海道自身が、あるいは記者自身も東京出身だったりするんですが、北海道に住んでみたそういう人間からの視点ですね、やっぱりそれがでてきているんですね。そういう点を学生に見てもらおうというのが非常にいいのではないかと思うわけですね。

進藤 僕なんかは地域性を捉える場合に縦糸と横糸を組み合わせて織っていくといいのではないか、縦糸というのは歴史ですね、横糸というのは地域間の比較といひましようか、

あるんですね。取り上げてみますと、一つは「内国植民地」、北海道は内国植民地であるという植民地論に関連しまして、小山先生から「第三期の植民地化」というシェーマのようなものが出されております。それから宮良先生からは「東北七県」、あるいは「津軽海峽圏」

いま小山先生から言われたように、一つは東京の人、本州の人の視点で北海道を見るとか、そういう横との連関で地域を浮き彫りにするというのはアプローチとして非常に面白いし、歴史の問題も、ある途中の歴史だけじゃなくて、現代との流れの関係・関連みたいなものが糸のように流れていけば、それがくみあわさって一つの地域性が浮き彫りになってくる。そのような感じをいつももっておりまして対話して行くわけですけども、確かにおっしゃられるように、そういった様々な視点をもって授業にあたるということで、授業効果も上がらうし、学生も大変喜ぶだろうという気がしています。時間もあまりございませんので、次の課題に行きたいんですが、よろしいでしょうか。

というような地域設定の問題が出されております。その中で文化の変容というか、文化を作る担い手の問題をとりあげた提起があるわけですけども、北海道を見るときに、僕など地理をやっている関係から「海峽圏」なんていうのは非常に面白い問題設定に聞こえるん

ですけれども、そのへんから始めていただいたあと、それぞれの先生方のご意見を伺えればと思うんです。

岩崎 小山先生の「第三期の植民地化論」

というのをもう少し展開してもらえませんか。

小山 もう非常に感覚的な捉え方だということ、聞いていただくしかないと思うんですけれども、ある本を読んでおりましたら、今の中央バスですね。あれを東急が乗っ取りをはかったんですね。昭和三十年代の前半だったと思うんですが、これは徹底的に抵抗しまして、中央バス、それから背景資本が徹底的に抵抗しまして守りきったんですね。それから約三十年程たった現在、本州資本が例えば交通機関を支配してるとね、いわゆる運輸資本です。運輸資本はほぼ完全に本州資本に制圧されています。これは国鉄解体に分割民営化ですね。これがものすごくそれを促進しただろうということは容易に推測がつくんですけれども、東急資本と西武資本ですね、これが、いわばかつての西欧諸国がアフリカや南アメリカを分割したように、まず物流と人の流れとかを支配するそういう運輸交通手段を分割している。こういうことが一つ私は感じています。

もう一つはやはり北海道の一次産業、二次産業の停滞というか、衰退といっても間違いはないと思うんですが、その問題と第三次産

業化ですね。第三次産業化といった場合には、都市化の問題がありますね。例えば札幌圏なら札幌圏の産業構造、就業構造から見まして、これは非常な比率で七〇何%でしたか、七八

%ぐらいでしたか、ものすごい高い比率で、いわゆる第三次産業の就業人口ですね。八五年で六三・七%ですよ、北海道全体で。札幌で七五〇七六%はいつてると思うんですね。

そういう状況になってきて、商業資本が地域の商業資本がほとんど残っていないんです。

ほぼ完全に本州の大商業資本に支配されている。工業資本でいえば北海道から例えば出発した雪印なんていうのは、むしろ独占資本になりあがってるわけですね。そういう点では確かにさつき進藤先生も言われたように、横糸という視点で言うと、決して他地域とあまり本質的な違いはないんですけれども、ただ他地域の場合は地場で育ってきたものがかなり強力であって、それで一定の地域を支配できる、そういう経済構造なり、産業構造をまだ維持してるものがあるわけです。

北海道はそれが基本的になかった。それは明治期まで遡って説明しないと説明できないと思うんですね。そういう形になってきたのは、やはり私としては新しい時代であって、まさしく第三次リゾート化の問題、観光化の問題ですね、この問題を含んで、四全総の問題も当然入ってくるわけですが、やはり

第三期の、未曾有の新しい時代だというふうな捉えて、それを第三次の植民地化といったそういう言葉でちょっとセンセーショナルに言いたかったわけです。

進藤 桑原先生もさつき近代北海道史の中の一つの視点として内国植民地、北海道と似たような性格をもつ地域として沖縄があるというふうにおっしゃっているわけですが、この沖縄、北海道というのは日本の中心から遠いというか、縁辺性のあるペリフェリーだという意味を言われました。それは沖縄と北海道に共通した何かが潜在しているのか、異質性があるとすればなにか、その辺はどうですか。

桑原 そうですね、非常に感覚的なことなんですけれども、我々はいわゆる本州のことを「内地」という風にかつて呼びました。今でもそんな風に言う人がいるんですね。ということは、これは日本の中でも北海道を除いた本州と北海道とは違うんだという意識がどこかにあるから「内地」という言葉を使うんです。それと同じように沖縄の人たちも、宮良先生ご存知のように、「本土」といつたり、昔はなんでしょうが、「ヤマト」とか「内地」とか「他府県」とか、いろんな変遷をしているようですが、最終的に「本土」に落ちついたわけですね。ですからそういうふうな自分達の住んでいる地域をですね、本州、四

国、九州を含めた地域とは違うんだというふうに見ているのは沖縄と北海道しかない。その点から見ても、もちろん前史は違いますが、沖縄と北海道は。前身の歴史は違いますが、ある意味では非常に似ているということがあると思うんですね。そういう点では共通しているわけです。それで面白いことに今でも使われていますが、「内地」という用語はこの手許のプリントにありますけれども、明治六年に開拓使という役所は公文書の中で使つてはいけないという意味の達を出しているわけですね。つまり「内地」という言葉は、逆に「北海道は内地じゃない」という意識を道民に植えつけさせるといふふうの開拓使は思つたのでしよう。

ですから明治六年の時点では、これからの公文書の中では「内地」と呼ばないとか、さきほど岩崎先生もおっしゃったと思うんですけども、「府県」ということばを使用しろ、といっているわけです。この「内地」という言葉を使つてはいけないということですが、多分それは守られなかったんですね。ですから今でも「内地」という言葉が残っているし、やはりそういう言葉が意味を持つような社会構造、地域構造が残っているんだということ、その意味では小山先生の言われる「第三期の植民地」時代に相当するかどうかかわりませんが、そんな要素が多分にある

とは思っています。

進藤 宮良先生は沖縄出身という立場から、どうなんでしょう。この二つの地域が日本の両サイドにあるということで、異質性と共通性というものをどんなふうに考えますか。

宮良 文化の具体的な内容については北海道と沖縄とは違うと思います。ただ歴史的に置かれている状況といえますか、それが似ています。沖縄が、いわゆるヤマトウに併合されたのは、慶長十四年の薩摩の琉球入りなんですよ。北海道の発展もその頃から、松前藩が出来たのもその頃ですよ。その時代をいしているんですよ。その後の明治期以降の政治的なかわり合いには、共通している問題があると思うんですよ。それによって、表出する現象が似てるんですね。ただ、現象は同じでも内容的に違う点もあります。例えば、離婚の問題を取り上げてみますと、沖縄と北海道がいつも一、二を争っています。今年が北海道が一位ならば、来年は沖縄が一位だという形ですね、離婚が北海道と沖縄には非常に多いわけです。それでは、北海道と沖縄の違いはどこにあるかと言いますと、私なりの解釈ですけども、北海道の場合は、文化の形成が新しいところから来ていると思うんです。

これは、あまり言われていないんですけども、先程ローンを返せないという話がありま

したね、小山先生でしたか。ローンを返せない、そこに特徴の一つがあります。つまり札幌を見て、札幌だけじゃなくて北海道に歴史の蓄積がないですね。それでやはり各県から来たいろいろな人々の生活の違いから、文化的葛藤が生じ離婚が起こるといふ点も今一つあります。経済的に北海道の場合は、特に札幌の場合は、周辺地域から来た人々が若い人口で構成されているわけですから、自分の経済的力は考えず無計画に家を買、マイカーを買ってローンを組み、生活環境を整えたとしても、支払いがある。全部ローンですから、そういうことで破綻する例が多いんじゃないかと思うんですよ。まだよく調べてませんが、おそらく結婚する年齢も低いと思います、北海道の場合は。

そういうような様々な要因が重なって簡単に離婚する。沖縄は離婚した人を支える社会的基盤があるというか、やはり親族の結合がまだ強いというか。伝統的には離婚した時に残される子供がいますね、その扱い、いわゆる私生児ですね、それに対してそれほど差別をしない。本州の伝統的社会は差別をしましですけども、親戚縁者の中で子供を育てるといふ風潮があるわけですね。ですから受皿があるといえると思います。そういうことに要因があるんじゃないかと思うんですね、ですから離婚という表出現象は同じであつても、

文化の中身は異なっているという具合にですね。

岩崎 これは宮良先生にお伺いしたいんですが、北海道というのは沖繩とはいろいろな意味の違いがあると思うんです。根本的には原住民が誰だったか、どれだけいたかということ、つまり植民地は移殖植民地と征服植民地があります。例えばアメリカ大陸のような、インディアンはいても人口が稀薄なところに移民するのと、インドに移民するというのでは全然違うわけですよ。アジアに植民するという場合は、アジア的な共同体とかアジア的な生産様式とか、その上にイギリスなりオランダなりが移植して作り上げていくという過程ですよ。だけどアメリカの場合はインディアンを追っ払ってそこでそういう意味では封建社会のないといえますか、イギリス的社会、新しい社会を作る。そういう意味ではどうなんですか、沖繩と北海道というののもちろん乱暴な議論なんですけども、アメリカとインドとの違いと同じように北海道と沖繩の違いといえるのでしょうか。

宮良 沖繩の場合はやっぱり住んでいる人が昔から同一で歴史を、文化を、共有しているということ。異民族は移住していません。ヤマトウンチュをどう考えるかによって、話は異なりますが…。

岩崎 要するに歴史が継続しているわけ

ですね。

宮良 継続しているわけですよ、もともと人間のみが継続して居住していますから。ところが北海道の場合は母村を異にしている和人がアイヌ社会に移住して来てアイヌを支配し、和人社会を形成しているわけです。ですから北海道と沖繩とは文化の内容は異なると思います。ただ明治以降の政策によって共通する面が現れているんじゃないかと思うんですが、それは桑原先生の専門ですから、先生の方が詳しいと思うんです。

桑原 そうですね、例えば北海道は先住のアイヌの人達がいきましたね。人口は非常に少ないですけども、明治初期で二万人弱ですか。それから沖繩にももちろん琉球民族と呼ばれる人々がいましたよね。

宮良 このようなことで、北海道と沖繩とは、文化的には異質な面がありますが、明治政府のとった政策には共通する面があります。

桑原 明治政府のいろいろな政策を見てみると、例えば、沖繩の人びとに対し、沖繩文化をすてて、「ヤマト」化する、要するに日本側の同化政策というのが続けられ、同じようなことが北海道のアイヌ社会に対してもみられます。ですからそういう同化政策を強制してしやにむに本土化・内地化をはかるというような点では、北海道のアイヌの人びとそれ

から沖繩の人々にも共通する問題ではないかと思えます。

宮良 北海道の場合には現にアイヌと和人がいるわけですよ、その接触過程においてさまざまな問題が起こっているわけですね、ところが沖繩の場合はいわゆるヤマトウンチュは政府官僚であり、県庁の役人ですね、こういった人々が若干沖繩に赴いて、生活をしていたのです。それには大きな違いがあると思います。

彼等を通して沖繩を支配した、つまり明治政府の政策としては、皇民化政策をとったでしょう。これは沖繩だけじゃなくて朝鮮においてもおこなったわけですよ。台湾においてもおこなったわけですよ。つまり私は台湾に小学校のときいたんですけど、日本人の尋常小学校があつてこれは日本人の小学校であつて、台湾の人々は公学校に行っていました。日本の人がかなり向こうにいつて生活しているわけです。おそらく朝鮮もそうでしょう。

実際に朝鮮にも大量の日本人がいつているわけでしょう。そうですね。中国にもいつているわけです。ところが台湾でもかなり大きな人口の植民化の先兵として赴き、日本人社会を形成していましたよね。ところが沖繩の場合はあまり行っていない。つまり、ヤマトウンチュと称する日本人がですね。しかし、政府の政策は共通していました。

岩崎 それはどうなんですか、例えば台湾とか朝鮮とか中国というのはまさに日本帝国時代、やっぱり植民政策として支配する政策。その中で土地を支配し、人口を支配するというのが政策ですけども、沖縄の場合はそういう位置づけというのがなかったんじゃないですか。つまり人口は編成されているわけでしょうか。問題はかなり政治的な問題とていいますか、そのレベルなんじゃないですか。

宮良 そうだともいいますよ。

岩崎 そういう点では北海道ですと、はじめから資源なり人口なり食糧なり、それを収奪するといえますか、それを創出するといえますかそういう過程ではじめて位置づけられているわけですよ。日本資本主義にとつての沖縄と北海道の位置づけとは、全然違うんじゃないかな。そういう経済政策と本来的にそこに人口、アイヌが数万いたとしても、それは追っ払ったり、実質的には稀薄なところに和人が住みつく過程ですから。沖縄の場合ははじめからそこに存在しているわけですよ。それ自体についてはほとんど手がつけられない。政治的にどうか、それはそれなりの思わくはいろいろあったとしても、性格づけはだいぶ違うんじゃないか。

進藤 北海道は移住植民地なわけですよ、アイヌの人々もいたかもしれないけども、圧倒的に多くの人々が海を渡って植民し、まだ

資本にとつては未知数な経済的空白地帯をマーカーにしてゆくような形で支配を続けてきた。沖縄は琉球王朝の伝統を残しながらも、資本にとつてそれほど魅力ある市場ではなかったんじゃないか、だから資本の帝国主義的な侵略がずっと遅くなつてでなければ展開されないというような面が決定的に違うように思いますね。

桑原 僕は例えば、従来の日本近代史の流れをみていて、その上で沖縄を見ますと、ずっと明治以降の政策展開の中で日本、近代日本に対してどう反応をするかというのが、例えば日本化した方がいいとかですね、いや反日本化だとか、いろいろな対応の仕方が沖縄の側にあつたと思うんです。そして実はそういうふう近代日本からいろいろな面で差別されている地域というのは、この北海道と沖縄以外にはなかったんだということが北海道の人間にはわかるわけですね。ですから、自分たちの地域を非常に特殊視するというような視点を排して相対化するという意味では、北海道と沖縄というのをやっぱり対置しながら近代日本の実像と言いますか、帝国主義的な姿が沖縄と北海道を実験場として朝鮮とか台湾で顕在化するわけですが、そういう意味で沖縄と北海道を比べるということが、一定の意味を持つんじゃないかということをお願いしたいんだけど、なかなかそういう意図が

理解されないんです。つまり、沖縄と北海道を同じように見ていると言われるんですけども、そうではないんです。前にも述べたように、この両地域はベースが違ふんですから。ただ、少なくとも明治政府は、沖縄も北海道も政治面、政策面では同等に扱っていることだけは事実です。

岩崎 そして、政策としては現在も沖縄と北海道に開発庁がある。

桑原 現在の開発庁の予算書の上でも、北海道は内地と区別されているとありますよね。

小山 確かに産業構造としては沖縄のことは殆ど知らないんですが、北海道は土木経済とか、札幌圏を中心にしたいわゆる支店経済とか出店経済とか言われていますが、いわゆる地場資本として、かなり結束力を持っている、地域に対する支配力を持っているのは、そういう部分はまだあるだろう、北海道は。沖縄も、おそらく、国場公昌などは建設資本家でしょう。ですからそういう点ではおそらく非常に似てるんじゃないか、中央からの資金、国家資金を導入してそれに寄生して生きていくという限りではやはり後背地であるわけで、そこで沖縄と北海道が決定的に違ふのはやはり北海道が沖縄に比べると資源を持っている。それを略奪できるうま味があつた。しかも明治以降の開拓政策の中でかなり強制的に移住

させたわけですね。沖縄に強制的に移住させられたというのではないわけですね。そのところで工業化の道すじと言いますか、経路というのは沖縄とはまったく違った独自性とか特殊性を持つてゐるんです。その点が、これは私の専門ではないので何とも言いにくいのですが、人々の気質ですとか、そういうものに影響してゐるんじゃないかという気がしてきます。

宮良 沖縄の場合は、歴史を見てもわかるように、慶長十四年には薩摩が支配したわけでしょう。そして、そのあとに皇民化政策というのが行われてきたという点が沖縄の特徴で、そのあとはまたアメリカの支配でしょう。そして、またヤマトウに帰ってきたという紆余曲折がありますので、沖縄の地場産業の育成においては、本土の資本の流入がごく最近ではない。

小山 沖縄海洋博あれ以降、ものすごい観光資本の流入があったというふう言われていますね。

宮良 土地の買い占めもそれ以降、海洋博以降に、石垣島なんかほとんど買い占られた。石垣だけじゃなくて他の離島も同じですよ。

岩崎 先程の小山先生の話は非常に面白い視点だと思ふんです。つまり北海道の歴史を見てきた場合に辺境性が拡大する時期といわばその「内地化」するといえますか、

そういう時期があつて、そこに法則性が、多分あるんじゃないかという感じがしたわけですが、たとえば大きな転換点と言いますか、例え産業構造の転換だとか、金融自由化だとか、輸入自由化だとか、農業自由化だとか、そういう大きな転換、その時には辺境性が顕在化する。一定の蓄積構造が安定している時は「内地化」が広がる。それが第三期であるのか第四期であるのかはともかく、そういう点では間違いなく東京一極集中的に東京マネーが世界を支配するという中で、対極的に地域問題だとか産業の格差の問題が出てきてるわけですよ。それで北海道に何があるかといえ、農林水産業、炭鉱とか鉄鋼とかですね、要するに素材型のものじゃないわけですね。あとは観光しかない。その部分がクロージアアップされる。そういう意味ではまさに辺境性が今拡大している時期だというふうに言えるのかも知れませんね。

その点で小山先生が、交通機関の支配だとか、金融の支配だとか、そういういわば資本の側からおっしゃいましたが、僕は農業の点から見ても全く同感です。つまり歴史的に言えば先程言いましたけど、人口だとか資源だとか土地だとか、これのいわゆる調節弁ですよ。つまり都合のいい時はホープであるし、都合の悪い時はヤッカイドウである。かつては「農業基本法の優等生」、「構造政策の優等

生」であるというふうにしてもはやされたところが今になると過剰処理の押し付けといえますか、米の生産調整を過大に押し付けられている。

それと北海道はかつては五%経済で、今四%経済で、景気が悪い時は比率が高く、景気のいい時は低くなつていた。やがて三%台になつてしまふかもしれない。今景気がいいと言われている時、全国比がさらに下がつてきている。そういう点ではまさに小山先生が言われる、非常に大きな転換点という感じがします。

宮良 今の経済、政治の問題から北海道を見ようという、しかも支配構造とか産業構造の視点から見ようというのが、今の議論の中心になつていますでしょう。もう少し歴史的な文化的な内容というか、地域性、北海道に視点を据えた地域性の問題という形で展開できませんかね。どうでしょうか。

進藤 その点の問題提起を宮良先生からしてくださいね。

宮良 私が言いたいことは、先程進藤先生がおっしゃつたように、例えば私が津軽海峽文化圏域と言つてゐるわけですが、その性格付けだとか、専門によつていろいろな区分けというものがあるだろうと思ふんですが、そういったものを重ねながら地域の話ができないか、歴史の縦の流れと、地域という横の流れ

を重ねることによって、専門の違いによってラグが生じてきますでしょう。その問題を問題視できないかなと思うんですが。

進藤 今の海峽圏はもうちょっと待っていただいて、いろいろまだ議論したいことがあるんですよ。先程、小山先生からは北海道は一次産業、二次産業という部分が衰退産業になっている、そして三次産業が膨らんでいる、全体としても膨らんでいると。札幌圏のように特に人口集中地域はそういう傾向が強いわけですけども、しかし考えてみると北海道の農業が面的な広い範囲を支配しているから、その上に乗って、三次産業というのかなり活発化しているという側面があるわけですね。そこらへんのところ岩崎先生は、どういうふう在一次産業が衰退なのかどうなのか……。

岩崎 確かに北海道農業の生産額は全国シェアの中で高くなっている、そこに発展の目は確かにあるのだけれど、裏を返せば府県農業の衰退がそこにある。その中で北海道は加工原料型農業で一番自由化の打撃をうけている。しかもいわゆる付加価値は低い。さらにその加工も東京資本が第一次産業、第二次産業も含めて、いわばすいあげていくという過程ですね。都合のいいところだけ持ってきてますからね、そういう意味では人口も減ってくるし、付加価値は全部持って行かれると

いう、まさに再編の時期というか、悪い意味で、残念ながらそういう時期だと思うんですね。

小山 東京資本というような言い方でいえば、今の日本の独占資本のいわゆるアジア諸国、特に東南アジア諸国を生産基地として利用していくという方向と重ねあわせて研究していくと非常によいと思っているわけですね。いすず自動車にいきますと北海道の苫小牧のですね、いすず自動車なりの戦略でもってやったはずなんです。しかし完全に目算が狂った。その他のもつとりリーダーシップをもった独占資本が、自動車資本がいきなり現地化していくわけですね、海外へ。乗り遅れた部分ははどうするかというと、三菱自動車なんか典型的ですけども、アメリカ資本との提携、それから韓国との提携、それからいわゆる低賃金労働力を求めているところ、台湾だとか香港だとかフィリピンも利用していくわけですね。その場合に韓国との関係で言うと非常にもしろいんですが、韓国との関係では一定程度、技術移転をせざるを得ないわけですね。そうすると韓国は、今はいろんな状況の変化で韓国も停滞気味になっていきますけれども、かなり韓国に技術移転していくということによって日本の競争相手になっていく。北海道の場合は、これはもういろんな人が広く研究されているわけですけども、機械工業と

いうのはほとんど移植されない。ですから独自の、産業革命論の問題もあるんですが、産業革命の過程が例えば明治期に二つの戦争を挟んで展開されていった時に、機械工業として自立化していかない。ですから産業循環自体が自立化していかないんですね。そして技術は移転しない。岩崎先生が言ったように、資源だけ取って付加価値は内地へ持っていく、そういう産業構造が出来てしまった。今、新しく道央テクノポリスだとかいう形で、いわゆる地域開発問題とからんで、本州の機械工業が進出しても、それは基本的には主流ではないと思うんです。そこらへんが決定的に違うところであるし、またその違いというのを本州資本というか日本の独占資本が海外、特に東南アジアあるいはEC・北米そういうところの関係で展開していることと重ね合わせて見ないと、北海道の位置づけというのはわからないと思うんです。

宮良 私の問題意識としては、聞いていると社会問題のように聞こえるわけですよ。そういうふうに通じていかかわりませんけど、政治・経済の問題で北海道を見ているということは、それがひいては地域や文化に影響を及ぼすということではわかるんですけど、北海道が歴史的過程に培ってきた、文化的・社会的な問題にですね、北海道にはもう歴史的な蓄積があると思うんですが。そういう問題

については話題になりませんか。

岩崎 宮良先生、分りませんか。というのは産業構造とか地域性とかということと、村落構造とかとそれは関連あるんですよ。ただ、先生おっしゃるようにストレートにすぐとはならない、これはまさに歴史だったと思うんです。僕もさっきの海峽圏は先生にお伺いたいで、それは。

進藤 それもまたやりましょう。そしてまた整合性があるかどうか、今いろんな角度から問題提起されているので、一応ここはおきながら北海道の内部の地域性と、外部からのいろんなアプローチがあるわけですから、その外部の問題で先程宮良先生が提起されました、東北、要するに渡島、松山、ここは東北の文化圏というか、東北の生活圏というか、東北そのものである。だから東北六県に一県を加えるに値するから「七県論」とか、あるいは「津軽海峽圏」というのは少し説明がほしいのです。そういうアプローチは、北海道の地域性を考える場合にどのような有効性があるんでしょうか。

岩崎 質問したいんですけども、その場合に東北六県といってもいろいろあるし、文化や歴史もいろいろ違うと思うんですけども、津軽海峽圏という場合は、今の県で言えば青森、岩手、秋田、それから北陸も入るんですか。

宮良 生活文化の内容としては、北陸も場合によっては入る。いきなり最初から地域の問題にしているわけではありません。

岩崎 場合によっては入るんですか。つまりそれとその他の東北の何が違うかということとを言っていたかかないと。津軽と道南が、他の東北とは違ってむしろ近いんだということをおっしゃっていると思うんですよ。そのへんの根拠をちょっと言っていたきたい。

宮良 それは桑原先生に聞きたいわけですけども、歴史の流れで人口移動でもたらされた生活文化ですね。そのことを僕は頭において、その歴史の縦軸を桑原先生あたりに話していただいて、そのへんがどうなっているのかつなげる必要があると思うんです。歴史的な北海道の人口形成の過程で。漁民が先に入ってきて。

桑原 明治以前に限定すれば、漁民も含めて移住者は圧倒的に東北地方出身だと思えますが。

宮良 という形で、私はそういう流れの中で考えていきますと、漁民が先に定着してきてたわけですね、生活文化の内容を比べてみると、ほとんど類似しているんです。例えば年中行事にみる食文化、親族の、家族の構造ですとか、経済学者がみる社会構造でなくて、我々がいう社会構造ですね。比較においてもほとんど似ているんですよ。戦前までの東北

の農村あたりの家族の構造が、北海道の漁村もそうなんですけども、網元を中心とした労働組織も非常に似ています。例えば東北においては同族がありますけども、同族のなかに非血縁を含む意味だとか。これは道南地域も東北側もほとんど類似している。それからその他の生活文化、例えば通過儀礼においてもほとんど似ているわけですね。

それから宗教生活において葬式のやり方とか、衣・食の文化ですね、それから住文化です、そういったものがほとんど類似しています。

岩崎 ちょっとごめんなさい、話の途中で悪いんですけども、先生のおっしゃるのは、津軽文化圏が、海峽圏、それは東北一般じゃないはずなんです。宮良先生の立論からすれば、東北一般と同じならば東北七県だとかな道南も東北の延長だという反論にならないんですよ。つまり東北の他の地域より津軽の方が、道南との類似性がはるかに強いということから、先生の立論があるんです。ですから先生のおっしゃっている道南と東北一般が同じだと言うんだしたら、反論じゃなくまったくその理論になってしまいうんじやないですか。

宮良 つまり・・・。

岩崎 つまり、東北といっても山地帯は海辺と違うと思うんですよ。その部分の東北の

海辺と道南が文化的な交流なり文化的な類似性があつて、それは東北の山地帯とはかなり異質だということにならないと先生の立論は証明されないんじゃないですか。

進藤 宮良先生は、僕は東北七県論というのはよくわかるんですよ。東北地方の影響というのは道南にぐっと押し寄せてきて、今言つたように住文化だとか、食文化とかいろいろなものがある東北に染色されたという意味では東北七県、それとは別に海峡圏ということもつとせまい範囲・・・。

宮良 海峡を中心とした海峡圏を広く見ているわけですよ。ですからその線をどこで引くかということについては、まだ調査が進んでいないので未定だけれども、そういう意味においては、東北も北陸も入ってきてますよね。例えば、北前船の往来のはげしかった江差あたりに行きますと、北陸の文化要素がみられるわけです。北前船がもたらした文化がありますよね。それが今どこまで及んでい

るかということですが、それは、線が引けないので、とりあえず津軽海峡を挟んだ両地域の文化要素が共通している地域というくらいで立論をしているに過ぎないんですよ。

桑原 ただ従来の見方では東北と北海道というのは、津軽海峡をこえたら内地と外地というか、この両者は違うんだという意識ですつと把握されてきたわけでしょう。ところが北海道と東北の先史文化を取りあげてみると、例えば擦文文化というのは、北海道を母体にして東北まで覆うような先史文化ですよ。ですからアイヌ文化期を含めてある時期には、津軽海峡をはさんだ東北と北海道とが一体化した空間だったというふうなことも十分想定できるので・・・。

宮良 私はそういうことで言ったんです。つまり、相互に生活文化が接触する周辺地域(marginal area)としての津軽海峡文化圏を考えているわけです。ですから、それが東北とどう違うかというよりも、どこまで対岸の文化が北海道に及んでいるのか、また逆にアイヌ文化も例えば宮城県の地名からいいますと、山田秀三先生が述べている地名の地図がありますけれども、それは宮城県と山形の北部で線が引けるんですよ。ですから、あらゆる文化要素を重ねていったうえで、もしそれが確定できるなら、その地域が一つの文化圏として考えられるんじゃないか、とい

う程度概念というか、具体的に確定した線を引いた地域を考えたんじゃないやなくて、程度概念として考えてほしいと思うんです。ですから、線引きを執拗に迫られるのですけれども、線引きをしたところで、あとで調査を重ねていつて違っていたらどうしますか。

岩崎 農業経済の議論なんかでも東北七県論とか、東北の延長だとかよく使うんですよ。ですからちよつと視点が違うかもしれないけど、ほとんど重なるんですよ宮良先生のは。先生はそれを批判されて新しい視点を出すというふうには受け取ったものですか。それだつたら従来とどう違うんですか。道南の生活というのは確かに歴史的な下地だとか、生活様式とか東北地方と似てますね。それと道南がおもしろいというのは地理的にもあると思うんですよ。中小河川が楕型にあり、その河川の流域に集落が形成されるわけですよ、つまり道南の人から言えば奥地、札幌より北の地帯では大河川の流域で屯田兵村や開拓区画があり、また、畑作地帯でも酪農地帯でも台地を開発した農業が形成されるわけですよ。道南は中小河川の流域に集落が形成されて、集居とか密居とかの集落が形成される。そういう意味では歴史的なもの地理的な、気象的なものというのは他の北海道地帯と道南はかなり違う、異質だと思います。

宮良 それは違います。津軽海峡文化圏



桑原 真人氏

には文化の二重構造・三重構造が見られます。歴史的にみると、津軽半島と松前藩との関係はかかわりあいが強く見られる。その後明治あたりからはその以前にもかかわらずありありますけれども、下北半島の杣夫（そまふ）が北海道にきて木こりの仕事もするのですが、漁民になったり、船大工になったりしてまね。そして北海道の文化形成に影響を与え、また逆に北海道で形成された文化を東北にもたらす。それから北前船のもたらした文化が北海道や下北半島に影響を与えていく。例えば山車やまぐるまの文化、お祭りの時の山車は、津軽半島にはないんですよ。青森県では下北半島にしかないんですよ。それなども一つの特徴になって現れています。ですから、津軽海峡文化圏域は文化の重層構造がある地域です。ですけれどもこれは東北でも南の方にいくとそういうのはないでしょう。この点が違うのです。だから津軽海峡文化圏域は海峡をへだたてて東北方の人々が移住定着をしたり、出稼ぎに行ったりした人々が文化影響を与えた地域であり、北前船が運んだ文化が定着したりしている地域であり、そういう意味で北陸地方の文化も含み得る地域だといったのです。そういう意味で例えばデメン（出面）という北海道においてよく使われている言葉が、津軽海峡を越えて青森県、岩手県にあるんですよ。そういう細かな文化要素を重ねて見ているわ

けです。アイヌ文化の南限も含めてですね。

岩崎 それはよくわかりますよ。

宮良 ですから岩崎先生がおっしゃる東北文化圏と同じじゃないかという視点は確かに重なる部分があつて、そうかもしれないけれども、私は津軽海峡を挟んで相互に生活文化が影響しあっている地域はどこまでかということの問題にしているわけであつて、対岸の東北地方から北海道を見た場合、北海道のどこまでそれが及んでいるかということを行っているわけですよ。

岩崎 ですから海峡圏で海の文化はすごく似ていると思うんですよ。僕は歴史家でないからよくわからないが、東北でも漁村と農村、農村も平地水田地帯と農山村、山村の畑地帯とでは農業構造も集落も文化もかなり異なると思う。

宮良 私は東北農村の労働組織と道南の漁民の組織の問題は似ている、網元を中心とする労働組織はそっくりだと思えます。ですから農村・漁村という形でわかる前に、文化の同一性というのがあつて、その農業を職業とするか漁業を職業とするかという生業による分類はその次にするべきじゃないかと私は考えています。それから、岩崎先生は地形・気候などの自然的条件で立論されていますが、それは全く逆で、文化は自然を克服していきます。北海道で稲作をしているのがいい例で

はないでしょうか。日本人が移住したので稲を作っているのです。単純なことですが、その意味するところは大きいですよ。

進藤 ちよつと口をはさむようですけども、さつき桑原先生からも言われましたように、例えばアイヌ民族は北海道の方からかつて東北の一部まで居住し、それから擦文ですか、擦文文化も北海道をベースにそれがずっと東北の一部のエリアまでフォロワーしていた。そういう時代の一つの地域設定と、今度は逆に明治期以降、あるいは松前藩以降で、逆に本州から北海道の方に流れてきた時期の東北七県論とかという場合と、僕は時代によって、あるいはその時々々の文化の構造で地域区分の仕方は違ってくると思うんです。

宮良 ですから私の言う文化の重層構造というのは、津軽海峡を中心にさまざまな地域からもたらされた生活文化要素が、長い歴史的過程に複合している地域だから、その地域を特徴づける要素を確定しながら考えるべきだと思えます。そうすることによって津軽海峡文化圏域は、くつきりとその姿が浮き彫りにされてくるのです。

進藤 だから一概には言えないわけでしょう。宮良 ですから歴史的な長いスパンの中に生活文化の問題を考える必要があるということをお願いいたします。

進藤 ただ圏域を出す場合、ある程度線を

引かないと、あまりぼんやりしたところがマ
ージナルにあるというのも理解がしにくいの
ではないかと思えます。

宮良 社会構造、衣・食・住、年中行事、
それから通過儀礼とか、そういう文化要素を
全部含めて重ね合わせてみると、ここまでは
あるけども、ここまではないというのが全部
調べないといけないというのが私の立場です。
今、先生方の問題提起というのは、政治的、
経済的な流れの中で言っているわけですよ、
しかも現在でしょ。そのところが私が問題
にしている文化の問題と相違があるような感
じがするんです。

岩崎 ただ宮良先生、反論しなければなら
ない。違うことを議論しているからといって、
僕らは宮良先生に近づけようとしてるんで、
それは別の言葉と言われたら議論にならない。
宮良 そういうことをどのようにして考え
るか、桑原先生どうですか。

桑原 宮良先生、津軽海峽文化圏の時代設
定は大体どのくらいになりますか。

宮良 私はそういった具体的な時代設定は
よく分からない。どこまでかは。だから、歴
史家の研究成果を参考にしながら、その過程
の生活文化を調査をして具体的に過去に遡及
しながら積み上げ、そしてその変容過程を具
体的に説明していく。

桑原 どこまでいうか、おおまかな時代は

…。

宮良 生活文化は、その地域に居住する
人々の時間的にかかわりとその交渉過程の集積
によって特徴づけられるのですから、津軽海
峽文化圏域は明治以降の開拓村落に比べて歴
史のスパンを長く見ているわけです。

桑原 こういった地域的なとらえ方という
のは時代によって変わりますから、そういう
設定の仕方はちょっと長すぎるのではないで
すか。

宮良 長すぎますか。

岩崎 どういう影響を与えたか、地域的に
はどこまで、それは境界が難しいとか時代区
分が難しいとか。だいたいこんな形で変化す
るといって、なぜ変化したのか、なぜ融合した
のかそこに力点があるわけで、宮良先生はむ
しろそれが持続する文化が定着したり持続し
たりするところを強調される。それを
接点で議論しないと。

宮良 ですから、それを明らかにするため
に、お配りしたプリントにありますように、
各地域の生活文化の形式と変容の流れを想定
し、その流れにそって歴史的に、Iアイヌ民
族と和人の文化接触による生活文化、II津軽
海峽文化圏域の生活文化、III明治以降の開拓
村落の生活文化を地域に重ねて追求している
のです。A～Eの類型はI、IIにもあてはま
るのですが、それは歴史的な形成過程のスパ

ンが長いことから、IIIにおいては明治以降の

形成と変容ですから、生活文化要素が具体的
に生き生きと把握できますからIIIに位置づけ
たのです。さらにIVとしては、北前船などの
交易によってもたらされた生活文化であり、
お雇い外国人によつて外的インパクトによつ
てもたらされた生活文化であるからI～IIIに
重ね合わせていくと、北海道の生活文化の複
合過程が鮮明に浮き彫りにされてくるのです
です。例えば稲作文化地域は、明治以降
の移住者によつて形成された地域であります
から、おおよそ、A～Eの類型の村落となり、
文化の流動がI、IIに比べてみられる地域と
なって表れると思います。その過程を細かく
検討していくと、おのずと先生の提起してお
られる問題は解決されていくと思えますよ。

岩崎 ですから稲作が定着するというのは
明治ではなく、むしろ大正になってからです
からね、そういう意味じゃかなり歴史的なも
のじゃないですか、先生の言われるような団
体入植とか土族開拓とか、そういうところの
開拓政策と、村落形成との関連、非常に歴史
的には限定されていることじゃないですか。
それと、先生のおっしゃるかなり長い間に形
成されたという地域性とどう噛み合うか、そ
れを並列的にいろいろ先生のおっしゃったA
～Eまでのいろんな類型があるといつても、
問題は相互の関連がどうなるのが、むしろ

僕らは聞きたいわけですよ。

桑原　ですからさつきちょっと触れましたけれども、北海道と東北は違うんだという観念はわりあいあるわけです。それに対しては宮良先生が、現在津軽海峡文化圏の構想を提起されていると思うんです。ただ最近は何トネルの開通でまた青函一体論みたいな変なものもありますけれども。ですから鎌倉期までもってゆかなくても、明治期とかそのへんまでだって、津軽海峡文化圏というのは成立するんだということ言われたんじゃないですか。

宮良　特に今言った下北半島とこちらとの結びつきは江戸時代末期でしょうか、明治期からでしょうか、それ以降、北海道側へ移民が出稼ぎに来る時期というのはその頃でしょうね。

桑原　江戸時代の終わり頃から、北海道への出稼ぎが東北あたりでは急増します。

宮良　少なくともその頃以降は、非常に北海道に出稼ぎに来る人がいるわけですから、そのあとに津軽海峡文化圏の文化的な重層構造が鮮明になってきます。これが明確に現れてくるのは藩制時代以降に北前船が就航するようになって北前船が持ってきた文化が流入する時期まで遡るんでしょうね。

進藤　今、津軽海峡文化圏域ということで、道南に問題が絞られていますけども、実際宮

良先生がやられていることの中には北海道のいろんな地域に本州の人達が来て、本州の道南と同じような文化を持ち込んだ地域というのはいっぱいあるわけですね、そこは時代の流れにおいていろんな変質変容を遂げている。道南も遂げているんじゃないかと思うんですが、そういう関連はどうなんですか。

宮良　その部分は、私はすでにAとEの類型として論じてきたと思うのですが・・・。岩崎　そこが聞きたいんですけども、むしろ。

進藤　北海道という非常に広い地域ですから、地域論を展開するとき簡単に議論できない面があるんですね。個々の先生が研究されている分野をひろってみるといろんな違いが出てきて、どこでどうそれを一つのメルクマールでくくるかということになると、非常に難しくなってきたりします。我々は地図の上でいろいろおとしていって、無理なつくり方をいっばいして、あとで説明つかないということが出てくるわけですけどね。

宮良　そういうことで、慎重に発言しているのです。私は具体的な調査資料を積み上げて、私の北海道研究の集成期にこの問題は論じたいのです。じょじょには出していきますけれども。

小山　ただ私は経営学という立場、アプローチから見ますと、最近でもまだ論争華やか

なんです、日本の経営論というのがあるんですね。それは日本の特殊性をどういう制度のうえで見るのか、それとも心情だとか、文化主義的なアプローチというのがあつたわけですけども、それは武蔵大学の岩田龍子さんとか、そういうアプローチの仕方もあることも事実ですね。そういうことからいって、例えば開拓民なんだけどもその先に一定の土着性をもって定住して、そして基盤になるなら、その文化的な伝統というものを背負って、その人達がやってきて共同体を形成していく。これは例えば東京オリンピックを境にして、

東京が肥大化していく時に、関東周辺だとか東北だとか、ものすごい人口移動が起こるわけですね。その残ったところは残ったところであるけれども、その地域の伝統的な文化の担い手がなくなってしまうというような側面もあるわけですね。そういうふうになると、東京の方はいろんな出身者の混在ですから、いわば無国籍と言いますか、コスモポリタンとあってよいかどうかかわからないけども、まさしく無国籍ですね。そういうものがそれぞれ勝手に生活しているという地域になって、それでその他の地域がまだ文化的な伝統を大事にしようということですね。すると産業化ですとか、資本の進出というふうなそういう側面とのぶつかりあいを見ますと、私は一年だけ飛驒の高山にいたんですけども、あそ

こは地場の資本がものすごい外部に対する抵抗力をもっている。それはいろんな研究があるんですけども、いわゆる旦那衆意識といいますか、そういうものが一つのギルド的な伝統をもっていてそれが外部資本を排除している。せいぜい周辺を入れて五万ちよつと、旧市内ですと三万四、五千の小さな市ですけども、そういうような生き方をしているところ。それから私の出身地は金沢ですが、金沢というのは最近人口が増大してきている。北陸地方で唯一人口拡大していて、そして土着の人達がそういう文化伝統を継承したり、そのためには経済的な支配力を維持しなければならぬという側面があります。そこに中京、名古屋の名鉄なんかの資本がある時期からなだれこんでいるんですね。そこから軋轢が今おこってます。現実に東京資本も入っていますから、ものすごく起こってます。そういうのが北海道にあるような形で、先生のいわれるような文化圏みたいなものが本場に形成されたのか、という疑問はあるわけです。

宮良 少なくとも南の方はあるような気がするんです。道南あたりは。それほど強くはなくても道南地域には。

岩崎 どうなんですかね。そういう意味で道南農業を調べていきますと、例えば空知だとか十勝なんかと違って、集落の結束力みたいなものがかえってないと見てるんですが。

それは宮良先生と視点が違うのか、生活文化とかなるとかで、伝統的な儀式や冠婚葬祭の結束力はあるのかもしれないけれども、外部の資本とかちよつとした産業の変化とか、そういうものに対してはむしろ道南のほうが弱い気がするんですけども。

宮良 先生がおっしゃるのは道南の農村部ですか。そういうところは調査をしてないのでよくわかりませんが、AとEのタイプのいずれかに入ります。

岩崎 例えば福島町なんかは漁村ですけども、トンネルでガタガタになっちゃったわけでしょう。産業は工事が終わってガタガタですけども、村落もガタガタになってしまったんじゃないですか。

宮良 私も福島町の漁村は調査をしていますが、確かに村落はガタガタですね。けど他の本州の場合はそんなことは有り得ない。今、先生が言ったような。

岩崎 だから府県は外部資本が入ることに対するものすごい結束力がある。田んぼ一枚売る場合もやっぱり集落で決める。府県といってもいろいろ地域が違うでしょうけども、いわゆる伝統的農村地域と言いますか、共同体の強い地域といわれるのはやはりかなり強いものがある。

宮良 ということは岩崎先生、道南はそういう具合に見てないわけですね。

岩崎 僕はちよつと違うんじゃないかと思う。まだ感覚的で調べてないからわからないんですけど。

宮良 おっしゃる意味は東北六県と違うということですか。

岩崎 東北もかなりくずれてますからね、比較はできないんですけども。先生がおっしゃる道南の共同体は、共同体という言い方しか僕にはできないんですけども、ある意味では共同体は強い。共同体というのは難しいんですけども、要するに守りの組織ですよ。積極的に共同体で何かやるというのではなくて、古い時代からのお互いの扶助組織といいますか、それは村八分という逆な排他的要素も持ってますけども、けどそれは外部に対する守りの組織ですよ。外部に対する守りの強さというのを何ではかるかは難しいが、僕はひよつとして東北より道南のそういうものが弱いという感じがするんですけど…。

進藤 それはあとから自由にやっていただくことにしましょう。

小山 今の問題に関連してちよつと言わせていただくと、地域開発問題の議論がものすごいわけですね。例えば、夕張が第八次石炭政策で、石炭産業はもうダメで脱石炭産業だというときに観光化に走るといふ形をとったわけですね。確かに中田市長というある意味では優れたリーダーシップをもった行政マン

が出てひっばっていった。それであるところ

までは本当にそれは成功したかに見えてたんですが、松下興産にほぼ売つ払つたわけですよ。ああいうことが本州だとほぼできない。

特に本州の結束力の強い地域共同体とか、そういうものが根強く存在している地域では、おおよそ考えられない。ある資本にほぼ市の運命をゆだねちゃうというのが。これは室蘭とも対照的で非常におもしろいですね。この間、室蘭に行きまして新日鉄がこういう形で、今まではやっぱり新日鉄というのは殿様商売で、しかも東京なり本社東京を考えると、東京からやってきている、つまり東京にコントロールされている単なる手足に過ぎない。これを独立させていくためにどうしたらいいかを我々考えているんだということを言っていました。そうすると、室蘭の地域住民は確かに新日鉄だとか日鋼だとか日石だとかそういう企業によつて経済が支えられている部分が相当多かつた。これまでは圧倒的だったわけですよ。まさに企業城下町そのものだった。企業城下町の中から企業が衰退していくとか、あるいは撤退していくという時にもものすごい反発がおこつて、自分達で頼らないでいこうというふうになった時に、企業の人脈と決裂してしまふ。だから新日鉄の側から見ますと地方自治体は新日鉄のことを何も考えてくれない。こういう不満を持っています。こういう非常

に対照的だと思うんですね。

岩崎

共同体の結束だけでは確かに言えない。北海道は第二次産業がないから誘致しようといつたつて、誘致する企業がないからそれこそ原発でも自衛隊でもなんでも誘致するという要素はあるわけですよ。十年くらい前ですか泊の原発の事前調査みたいなのをやったことがあるんですけども、賛成地区と反対地区、それから漁業と農業の違いが出てくるんですよ。最終的にはいろんな共同体の要素とかいろいろありますけども、要するに安定した生産力をもっているかどうかですよ、農業なり漁業なりが。それが安定した生産力をもっていれば、原発はいらないということになるんですけども、何もないところで、まったくの過疎では展望はない。こうなればそれこそ原発でも核廃棄施設でも来てほしいということになつてしまふですよ。その意味では共同体という、いわゆる古いという受皿といいますか、それと現実の経済構造と言いますか、産業基盤というものがやはり一体となつて決まってくると思うんです。ですから先程ちよつと言つたのも、道南も含めてやっぱり企業誘致がないんですよ、なくてこれだけ地盤沈下していればそれにかわるものはない。だから室蘭に何かあるというのは、やはり室蘭には歴史があるんじゃないですか、そういう意味では衰退したとはいえそれなり

の産業基盤と言いますか、蓄積があつてその違いという両面をとらえないと、片手落ちだという気がします。

桑原

ちよつと聞いた話ですが、トマムは新しい企業城下町になりかねませんか……。

同時に東北地方でリクルートによつて開発された岩手の安比高原などもその好例だと思いますが。

岩崎

ほとんど展望ないんじゃないですか。まさに外からくる資本でしょ。外から来る資本というのは、鉄道から交通機関からホテルの中の土産物屋からリゾート施設から何まで全部外部からくるわけですよ。つまり根こそぎもつていかれちゃつて地元に戻元されないわけですね。

小山 外部からくるだけというか、固定投資からいいますと、完全に外部ですね。それでほとんど本州資本も入ります。ところが新日鉄室蘭の不満の一つは面白いんですよ。鉄を作るのに石炭が必要ですが、石炭を北炭の高いやつを買え、横路知事でさえそう言うから。俺たちは何だと思う、だけど買つてきた。ところが札幌市の地下鉄を作るときに日本鋼管のH型鋼を買つてるじゃないか。俺達のH型鋼をなんで買わない、鉄を何故買わない。こういう批判をもっているわけです。それは資本の論理からいうとそんなものは無茶苦茶なんですけれども、今やそういう心情がでて

きているというところはおもしろい。

そのへんをもうちよつと宮良先生の分野とあえて結びつけますと、経営史の研究は非常に最近進んできていますが、大きく分けて企業史と企業者史と二つあるんですよ。つまり企業者というのは人ですね。それで内地だったら近江商人の研究とかいろいろあるわけですが、そういうものが伝統化してその作られたものを、新しく産業革命を経てつくられたものでもよいのですが、例えば、繊維だとか織物だとかいうそういうところの一つの一定の産業基盤を持った共同体、それが北海道の場合は、やっぱり基本的にないんだと、なかったということが問題で、だから今の地場資本、建設資本あるいは土木資本を中心としてやっている。ですから道央圏の新しい開発というのに土木資本が出てきます。それが出てきてやらざるを得ないという状況です。北海道の地場資本というのは経営者意識というものが、今の時期になって初めて本州資本と対抗関係が一定程度出てきたのではないかという気がしています。その前までは、完全に外部から移植してできたものですね。その後徐々に都市化の中で建設資本が育ってきたり、あるいは多少都市中小商工業が育ってきたりして産業の蓄積ができたところで、またやられているわけですけども。やられているんだけれどもその中で一定の抵抗を示してい

る、そういう関係が生まれてきたんです。そのベースになっていく伝統的な文化意識とか、いわゆる土地意識、土地柄意識だとか、そういうものが本州のようにベースになって、一定の経済圏というものを構成しているという形にはどうもなっていないんじゃないかと思えます。

宮良 今の話題は興味深いものですよ。しかし古い文化だとか、これまで築かれてきたもの、そういうものだけでなく文化は絶えず重層・複合・変容していますよね。その中で別の枠組として北海道を捉えても、生活文化は具体的で、今話題にしておられるような政治的・経済的な問題があるにしても、地域に根づいた文化があるから、それだけでは捉えられないということを感じます。

ですから、別な秩序体系というか、従来本州で言っていた共同体が北海道にあるということ、私を私は言っているわけではないのです。

北海道村落社会の生活文化は伝統的社会から移住してきた人々によって作られていったんです。その過程に、今述べておられるように経済的・政治的な動きがあることはその通りだと思えます。それによって変わるものとも変わらないものもあると思います。ですけれども、今、小山先生の話の聞くと全部否定です。北海道というのは何もありませんということ、そういう具合に聞こえるんですけど

も。

小山 それは、私は、一定程度はあったと思うんですよ。でもそれが打倒されてきたんだと感じるんですね。

宮良 つまり本州的なものがまず前提にあって、そういったものが打倒されていったというよりは、いろんな人々がきて社会を構成して生活しているわけですから、文化変容を繰り返しながら社会が作られていくわけです。この点を問題にしないといけないと思います。展望がないと北海道はだめなわけですよ。

この座談会に参加している人はみんなよそのなわけですよ。だれ一人として道産子はいないでしょう。もう少し郷土に根ざした生活文化の一つ一つを考える議論があってもいいのではないですか。そういう中で北海道の社会・文化というものを構築していく方向を探索するということですね。私は以前はよく北海道の経済学者の講演やシンポジウムを聴きにいききました。ところが、多くの場合、本州資本にやられっぱなしの北海道を描いて終わるのです。これでは北海道に展望など感じられません。にっちもさっちも動けない袋小路の話ばかりです。やはり私は議論が違うと思います。北海道には実際に生きた人間が生活をしていて、それなりの生活をしています。もう少し未来に向かって光明を見い出せる議論ができないものかと思いました。研究者は

生活者として、庶民の立場からどうすれば展望が開けるかという視点をベースに、今の話題のような議論を含めて展開し、研究者は別世界で生活せずに、庶民と共に生活する方途を模索することが、時代の要請だと思います。生活文化の研究と云えば、過去の古めかしい文化の研究のように思われがちですが、決してそうではなく、庶民と共に歩む未来の学問だと思ふのです。その点が誤解されているようです。

進藤 ちょっと噛み合ったり噛み合わなかったりしているわけですが、今日はかなり放談的に座談会をしていただいているわけですが、まとめようという気はないんですね。ただ、非常に僕はいい話というか、それぞれの専門分野で専門外の知らないことがなるほどたくさん出てきているわけですが、もうちょっと本当は収斂させると、とくにいままで問題が提起されたことを総合的に収斂して、最後にやりたかった地域政策というか地域経済政策の問題、地域文化をどうつくるか、なにか展望に結びつけるような話題で、もう一回ぐらい座談会をやりたいですね。

最後に感想を一言ずつ言っていたと思いますが、僕の方からは、今日は、一村一品や企業誘致やリゾート開発や、あるいは北海道地域のリーダーシップの問題やいろいろ課題として最後にお話したかったんですが今日は

時間もなくてできないので、いままでの議論を踏まえて何か一言ずつ感想でも問題提起でもしていただいて、尻切れとんぼで結構ですから。岩崎先生からどうぞ。

岩崎 感想というよりも展望につながる話というのをちょっとしたいと思います。先程言いましたように北海道農業は国家投資と国家の政策価格に支えられて展開して、今それがはずされてきているという点ではかなり大きな激動の時期だというふうに思うんです。その中で非常におもしろいのは、一つは新しい集約化といいますか、新しい内包化といえますか、いままでは売るだけのいわゆる原料農産物を加工する、加工するのは外部資本という、売るだけの、つまり国家が買ってあげられるだけの農業形態だったのが、非常に集約化されてきているところがあるわけですね。

それとこの間、非常におもしろい、おもしろいという語弊があるんですけども、この二、三年の農業の厳しさの中で、実は負債が減ってきているんです。これはいろんな理由があるんですけども、投資が一順したとか、投資を抑えたとかいうこともあるんですけども、かなり経営努力をするようになったんですね。その中で僕は言ってきたんですけども、「ムリ、ムダ、ムラ」をなくせと。それがかなり徹底してきて自分の足もと、農業経

営の足もと、地域経営の足もとを見ると、ことがかなり真剣にやられてきているんですね。これは厳しいからやってきているということではあるんですけども、そういう意味で新しい目といいますか、そういうことが言えると思います。その点では従来の土地利用型で加工資本、加工利用型の農業から脱却しつつあるし、農業経営の足もとをみつつかると言えます。

それと、この過剰生産調整のもとで、当然農産物の質の問題がだいぶ問われてきている。その点では米にしても「ユキヒカリ」がうまくいかどうかはともかく、「きらら三九七」とか、開発されている。牛乳なんか消費拡大しているというのは、やっぱり乳脂率が高くなり質が高くなつたでしょう。北海道農業は、量から質への転化がおこなわれつつある。さらに北海道は冷害の歴史だったんですけども、冷害の度に新しい北海道農業、北海道農法が作られてきて、今はそういう意味では政治的冷害の中で新しい芽がでてきている。北海道農業というのは厳しい歴史であったと同時に、非常にずさんなといえますか、かなりいい加減な部分があったんですね、そのへんがかなり見直されているといえます。しかし、農業が内包化すると当然府県との競争の問題が出てくるんですね、産地間競争の問題が。今まで北海道は産地間競争であまり鍛えられて

なかったんですね、これからは何回かぶつかつて後退する局面もあるんでしょうけども、やっぱりそういう意味では経済の原理と云いますか、競争の中で新しいものが生まれるという点があると思います。その点では一口で

言えば、産業構造調整と言いますか、自由化の波の中で厳しい地域経済、農業経済なんだけど、その中で足もとを見る方向性みたいなのがでてきているので、やっぱりこのへんをどう伸ばすかが課題でしょう。そのためにはよく言われるんですけども、官依存体質と言いますか、いざとなれば政治家や財政に頼るといふ体質を改める必要がある。本質的にはそれをはずされたらどうしようもないんだけども、少なくとも地域のリーダーなり経営者なりが、その部分では自ら打開していくというそういうものが必要なんだというように思います。

桑原 私はやっぱり、我々が北海道から見て本州のことを「内地」と呼ぶということの意味をもう一回確認したいと思うんです。従来、「内地」という語には、自分達の住んでいる北海道は植民地だという意識がありすぎて、遅れているとか、後進地だか思いやすいからやめよう、という議論がいつききもあつたように思うんですが、今みたいになんでも東京への一極集中が進行し、地域的格差が拡大するという中で、やはりあえて北海道がこ

こに存在するという独自性というものを主張する意味でも、この言葉は残す必要があると思うんです。これからの北海道を考える上でも、ですからあえて「内地」という言葉だけは残しておきたい。

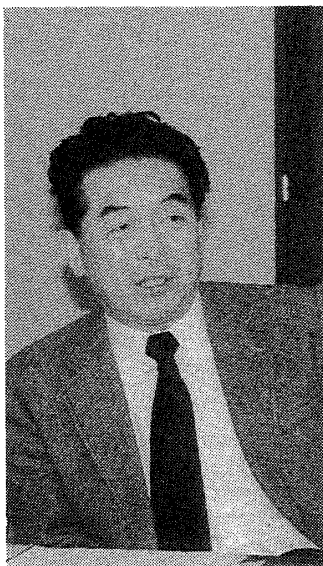
小山 今、桑原先生の発言がヒントになったんですけども、アパレル製品の売れ行き次第は札幌を試験地にと一般に言われてますね。いい意味でも悪い意味でもとらえられるんですけども、独自の、今例えば「北の衣料」だとか、「北の家屋」だとか、そういう今までと違った、差別化しようという方向が、かなり経営者の意識にも出てきているということは確かだろうと思うんですね。つまり地域間競争をやっていく時に、差別化しなくてはやっていけない。ですから、今回、例えばリゾート化で四十いくつかの市町村が同じような発想でワイワイやっているというのはどうなのかという話もあるんですが、独自のものを作っていくという方向でエネルギーが収斂されていけばおもしろい。その時にどんなスタイルでいくかということが重要だと思います。私は農業と漁業の問題、これはつまり一次産業、それからもう一つ言えば林業、これをどう持つていくのかということ、それから今トナムとかサホロの話ができましたけども、スポツと移植するというか、辺境の中における都市というのか、あるいは辺境文化というか、

都市の冒険というか、そこには都会人が多少の自然に触れたい、しかし、そこが開発されてしまったらフロンティアでなくなるからおもしろ味も何もない。そういうものを求めている。知床などはちょっと開発しちゃったらもうだめなんですよ。だめになる手前で抑えておきたいし、なおかつ観光化していきたい。こういう矛盾した問題意識があるんですね。それをどうやるのかというのがこれからの問題で、私は農業、漁業、林業、今言われている例えば産業の観光化という問題ですね、これをリゾート化していくとすれば、産業の観光化というのを北海道でどうやれるのかということの一つのヒントだと思うんです。

夕張の場合では、例の石炭の歴史村とか、旭川の優佳良織工芸館とか、いろんな事例はあるんですけども、例えば室蘭でも鉄は汚い産業なんだと。重くて熱くて汚いんですよ。そういうものから新しい産業イメージに転換していくというように、室蘭なら室蘭の自然港を大規模に見直せるような、そういうリーダーシップなり発想が成り立ちうるのかということに私は非常に関心がある。それとあとは技術をどう発展させるか。技術者の問題、つまり人の問題がかなり大きいと思います。何故道央圏がかるうじて企業誘致に成功しているかといえば、ひとえに技術者の問題ですね。飛行機でやってきて日帰りできる。

せいぜい二、三泊して帰れる。自分の家は東京ですという感覚です。これをどう打ち破っていったって北海道というのは独自の人材供給システムを確立できるかが課題だろう、そんなふうに思います。

宮良 私はどうしても北海道の場合はなんていうか、北海道の人々が北海道で生きている人々が、研究者も含めてやはり北海道を郷土として自分の立っている地域を認識するということが一番重要だと思っんですね。やはり言葉でいうとアイデンティティの確立というか、そのことが重要だと思います。やはりそういう北海道を郷土として北海道に生きていくということを各自が認識をして、そして地域的に郷土の生活文化を掘り起こし、文化の態様を解明するならば、それが力となっていくだろうと思っんですね。従来、北海道は



進藤 賢一氏

経済の面から開発という視点から議論が進められてきたわけですけども、もう少し生活文化の面からも研究がなされなければならぬと思います。コーポレイティブ・アイデンティティといいますが、そうしたようなものができていけば、北海道の今後の発展が望めると思っています。

進藤 今日議論、討論の中で北海道の持っている地域矛盾と言いますか、そういったものがいろんな角度、視点から語られまして、その結果として必ずしも北海道の将来が暗いということではない。いくつもの明るい展望も持ちうるんだという考え方が示されているわけですね。特に岩崎先生からは農業の国際化の中でも競争力をつけるための経営努力というのが実際見られるというような指摘もありましたし、小山先生から先進性アパレル商品に見られるような北海道発の先進性の問題、あるいは産業の観光化、この点ではちょっと例をあげますと、富良野市の場合ですね、富良野ってすごく若いヤングの人々が行くわけですけども、何が観光の目玉になっているかというと、必ずしもスキー場とか、倉本聡の「北の国から」の麓郷とか、それからワインじゃないんですね。要するに富良野の農業地

帯そのものが複合化していて、その農業地帯の持つ景色というか美しい景観というものが観光化されている。そういう意味では本当に産業の観光化そのものであって、そういった方向というのが今後非常にいい意味で模索できるんじゃないか。それから技術の発展というものが将来の展望にかなり影響する。あるいは独自性の問題は、宮良先生、桑原先生からはアイデンティティという問題で出されているわけですけども、やっぱり北海道はこれまでもってる独自性というのもあるし、これから作っていくか、独自の性というのがあるわけですね、そういったところを総合しまして、やっぱり明るい展望というのをなんとか切り拓く、そのために研究者というのは一定程度展望を前提にしたような研究活動というのが必要ではないかと思っんですね。ただ、実態調査で終わるだけじゃなくて、現実の矛盾というものを解消して明るい展望に結びつけるような方法論の組み立てというのが僕は必要な気がしているんですけども。今日はそういうことで、いろんな多面的な角度から、いろんな話題を提供していただきまして大変有難うございました。